

阿賀野の農園で初冬直播始まる

春の農繁期作業を軽減

初冬の田に種をまき、春に発芽させる「初冬直播」の取り組みが、阿賀野市の農園で始まった。育苗や田植え作業が不要になり、春の農繁期の作業量を軽減できるメリットがある。深刻化している担い手不足の打開策として注目が集まりつつあり、農園は「初冬直播が、地域農業の持続につながる」といいと期待している。

かえつ
の
農



安田興和農事の田で初冬直播を行う「スリップローラーシーダー」=9日、阿賀野市安田地区

9日、安田地区の五頭連峰の麓に広がる田で、トラクターがうなりを上げた。種をまくための機器「スリップローラーシーダー」が、肥料をまきつつ田を耕し、殺菌処理した種をまく。同所の有限会社「安田興和農事」は今年、約10%の初冬直播に取り組む。

取締役の本田充さん(39)によると、同社の従業員は7人で、田の面積は約75%。人口減少や高齢化を背景に、農地の集約・集積が進む中、同社が市内の農家から委託される田は今後、増えていく見込みだ。

しかし、面積が増えれば、春の代かきや耕起、田植えの作業量が増し、今いる人手だけでは賅いきれなくなる恐れがある。そこで、本田さんは作業を前年に分散できる初冬直播に注目した。

初冬直播は、岩手大学が研究、実践し

育苗や田植えが不要
担い手不足の打開策に

ている技術。発芽しないように十分に気温が下がってから田んぼに種をまき、そのまま雪の下で越冬させ、春に発芽、苗立ちさせる。春の代かきなどの作業を省ける上に、田植え機が入れないような深さのある田んぼにもトラクターで種をまくことができる。

昨年から試験的に30%の田でこしいぶきを育てたところ、雑草が増えやすい課題があったものの「くず米が少なく、品質に問題はなかった」と本田さん。今年から本格的に取り組むことにした。

市農林課によると、阿賀野市内で初冬直播に本格的に取り組むのは、安田興和農事が初めてとみられるという。県内では、関川村の農事業者も取り組んでいる。

農業機械販売のヤンマーアグリジャパン(新潟市西区)担当者は「省力化がで

きる初冬直播に興味を持つ農家が近年、増えてきている」と説明する。

ただ、費用面の課題がある。スリップローラーシーダーは1台300万円以上と高価で、機器を引っ張るトラクターも60馬力以上が必要となる。設備投資のハードルは高いのが現状だ。

それでも、地域農業の担い手不足が深刻化する中、本田さんは「この先、何かしなければ地域の農業が立ちゆかなくなる」と危機感を募らせる。初冬直播をはじめ、さまざまな農法を組み合わせることで「阿賀野市の農家がカバーできるキャパシティーが増えるといい」と語った。